●発行　三重県小中学校長会　津市桜橋 2-142　三重県教育文化会館内
TEL 059-227-7011　E-mail　info@mie-kochokai.com
●編集　三重県小中学校長会　広報委員会
●印刷　光出版印刷株式会社　松阪市久保町 1885-1　TEL 0598-29-1234

校長会みえ No.67

私の学校づくり

地域と響き合う学校づくり

四日市市立浜田小学校　校長　**前田　賢一**

浜田小学校は、地域に深く愛され、いつも温かなまなざしに包まれています。そんな恵まれた環境に感謝しながらも、「地域に支えられるだけでなく、学校から地域を元気にできないか」と考えてきました。

その思いを形にしたのが、創立 150 周年記念行事です。私は「校歌」を軸に、地域と喜びを分かち合う場を目指しました。校歌は卒業生で作家の丹羽文雄氏が作詞し、「鵜の森のみどり　菜の花の黄」と浜田の原風景を歌う、地域の誇りです。80 歳を超える方が「今でも歌える」と胸を張るほど、長く愛されてきました。

記念行事の目玉は『校歌大合唱』。校歌を一緒に歌うことを保護者や地域、卒業生にも広く呼びかけました。回覧板やポスターで周知すると、「楽しみにしている」「同級生に久しぶりに連絡した」と声が寄せられ、事前練習会には多くの方が集まりました。

迎えた当日、来賓席や形式的なあいさつをなくし、子どもたちが主役の会に。堂々と進行する姿に地域の方々の顔が輝きました。さらに、子どもたちが地域の歴史や未来を調べ、自分たちの思いを込めて作った「校歌 4 番」を発表すると、驚きと感動の声が上がりました。子どもたちが、自分たちの発表に耳を傾けてくださる地域の方を前に安心し、自信を深めていることが伝わってきました。

最後の大合唱では、子どもたちと地域の方が向き合い、体育館いっぱいに歌声を響かせました。世代を超えて校歌をともに歌う『奇跡の共有体験』は、地域の笑顔とともに、子どもたちの喜びにもつながりました。

地域を元気に、と考えたこの取り組み。行ってみれば地域の元気は子どもたちに返り、子どもたちの安心や喜び、そして自信につながるのだと気づきました。今後もそんな地域との相乗効果による“響き合い”を大切に、学校づくりを進めたいと考えています。

今日的課題の克服に向けて

若手教員の育成を目指して

鈴鹿市立桜島小学校　校長
大井　るみ

本校は、学級数 26 の学校です。その学級担任をしている 26 名のうち、15 名が経験 7 年以下の若手教員です。経験の浅い若手教員が、児童や保護者の対応に迷ったり、授業や校務分掌をうまく回せなかったりするのは、仕方がないことです。しかし、だからと言って、「学級が乱れてしまったり、子どもたちに力がつけられなかったりしても仕方ない」では済まされません。初任者が続々と採用されている今、いかに若手教員を支え、育て、学校経営を成り立たせていくかは、教育の今日的課題の一つであると考えます。

では、若手教員を育てるために支援する際、どんなことが大切なのでしょう。最近気づいたことは、【助ける】支援から【育てる】支援への転換が必要だということです。学級の子どもが落ち着かず、若手教員が大変そうなとき、ついつい、「支援者を教室に配置し、落ち着かない児童の対応をする」「負担を減らすために、校務の一部を他の職員が行う」などの【助ける】措置を考えがちです。もちろんそれも一時的に必要な措置ではありますが、そればかりだと、その教員は、「助けてもらって申し訳ない」「自分でできなくて情けない」という気持ちがどんどんふくれて辛くなり、メンタルを病むことになってしまうかもしれません。そのようにならないためには、どんなに大変そうでも、重要な役割を任せる場面を設定していくとよいように思います。若手教員をメインに立たせ、うまく進むように整えたり相談にのったりという裏方を周りの教員がさりげなくできることが理想です。重要な役割をやり遂げることで、自信がつき、有用感が上がります。スキルも身につき、ほかの場面でも生かすことができるようになります。本校の先生方が、学年での活動場面で若手教員をメインに立たせるなど、活躍させながら上手に支え育てている様子から、任せて【育てる】支援が若手教員の育成に大変有効だと実感する毎日です。

これからも、若手教員育成の方針を全職員で共有し、【育てる】支援ができる校内体制を整えていきたいと思います。

つながりを大切にした教育の推進

熊野市立新鹿小・中学校　校長
松田　元

新型コロナウイルス感染症の 5 類移行から 2 年。社会全体でリモートワークの普及、仕事のあり方に対する価値観の変化など、大きな変革がありました。

学校教育においても、修学旅行や運動会などの学校行事の見直しや ICT を活用した授業指導、会議のオンライン化も進みました。しかし、その一方で、人と人との「つながり」のあり方が大きく問われているように思います。

このような変化の中で、本校は「つながり」を教育活動の根幹としています。本校は、小学生 24 名と中学生 14 名が一つ屋根の下で生活する極小規模の小中併設校です。保育所も敷地内に隣接し、地域の避難所や文化の拠点ともなっている、地域とのつながりが強い学校です。

本校の学校教育目標は、「『つなぐ』…認め合い、高めあい、励ましあえる学校」。子どもたちどうし、小・中の教職員どうし、保護者や地域と学校が、「つながり」を大切にし、互いに認め合い、高めあい、励ましあえる学校を目指しています。

子どもたちは、小 1 から中 3 まで同じ屋根の下で学びます。時にはトラブルもありますが、家庭や地域に支えられて、子どもたちは大きく成長しています。

運動会は、コロナ禍で中止していた保護者・一般種目も復活させ、教職員もリレーに参加し、大いに盛り上がりました。特に、最終種目「じゃんけん列車」では、音楽にあわせて、地域や保護者、子どもたち、教職員がだんだんつながり、最後には全員で一つの輪になって閉会式。終了後には、地域の方々から喜びの言葉をいただき、あらためて、「つながり」の大切さを実感しました。

防災教育では、毎年、学校が中心となり、「新鹿防災ＤＡＹ」を設定。地域の防災拠点として、子どもたちだけでなく、地域や保護者の方々にも参加していただいて、一日、防災学習会を実施。地域全体で、防災意識が高まっていけるよう計画しています。

子どもたちは、様々な「つながり」の中で成長します。これからも、全職員がその成長に関わり、「つながり」を大切にした教育をすすめていきたいと考えています。

研究大会報告

◆全連小福岡大会報告◆

校長に求められる リーダーシップと「心のふるさと」となる学校経営

伊勢市立厚生小学校　校長
中村　元紀

第 77 回福岡大会、初日の全体会では、文部科学省講話と研究主題の趣旨説明を通して、予測困難な社会を生き抜く子どもたちに必要な資質・能力の育成と、それを牽引する校長のリーダーシップの重要性が確認されました。

午後の第 12 分科会では、研究課題「自立と共生の実現に向けた教育活動の推進」に基づき、北海道と福岡の実践についてグループ協議を行いました。協議の中で、「管理職による積極的な児童理解」、「多様な学びの場の提供と地域との連携」、「児童の多様な実態をとらえる定期的な支援計画の見直し」といった取組が、子どもたちの自立と共生を目指す上で効果的であると改めて感じました。

2 日目の全体会では、「志」をキーワードとした学校経営ビジョンを共有する中で、子どもたちが未来の創り手となるための教育環境の整備と、教職員が能力を最大限に発揮できる学校風土の醸成こそが、校長に求められる最重要課題であると認識を深めました。

続いて、サグラダ・ファミリア主任彫刻家・外尾悦郎氏による講演「志す」では、バルセロナでの経験を踏まえ、学校を「ふるさと」と定義付けされました。そして、「困難に直面したとき、最後に救ってくれるのは学校で得た言葉や教えである」と述べられ、学校教育が果たす役割の大きさと、人を幸せにする教育の力について、奥深いメッセージを送っていただきました。

今回の研究協議会は、変化の時代における小学校教育の核となる校長の責務と、教職員が担う精神的支柱としての学校の役割を深く考える貴重な機会となりました。

◆全日中香川大会報告◆

第76回 全日中香川大会に参加して

松阪市立飯南中学校　校長
藤本　伸一

10 月 23 日、24 日の両日、「育てよう 生きる力 創ろう 新たな時代の教育を海とアートの香川から」をスローガンに、「第 76 回全日本中学校長研究協議会 香川大会」が開催されました。

23 日の開会式では、教育が大きな転換期を迎えるなか、生徒の夢、そして生徒たちに託した夢を叶えるために、学校の課題に正面から立ち向かうという熱意と覚悟が挨拶として語られました。

文部科学省の説明では、次期学習指導要領に向け、多様な子どもたちの「深い学び」を確かなものにするため、教育の本質を捉えながら学校をどのように発展させていくかという指針が示されました。

全体協議会では、COCORO プランの効果的な実践に繋げるための提言や、自治的な活動を通じて「自分が大切にされている」という感度を高めるための人間尊重の教育について発表がなされました。

分科会のグループ協議では、全国から参集した校長先生方との有意義な意見交換ができ、私にとって本当に楽しいひとときでした。

24 日のスタートは、「音の宝石」と言われるサヌカイトの音色で疲れた心と体をリフレッシュさせていただきました。その後の記念講演では、人工知能（AI）研究の第一人者である東京大学大学院工学研究科の松尾豊教授より、「生成 AI の遍歴と社会への影響」について大変貴重な話を伺うことができました。

このたいへん有意義な 2 日間を通じて、限られた時間ではありましたが、全国から参集した校長先生方から新しい視点や学校経営の活力をいただき、大変実りある経験をさせていただきました。

ほぼ全国最少とも言える 60 数名という会員数で、これほど素晴らしい大会を運営し、温かいおもてなしをしてくださった香川県中学校長会の先生方に、心より感謝と敬意を表します。

◆東陸連小三重大会報告◆

第62回 東陸連小三重大会 兼県研究大会に参加して

員弁郡東員町笹尾東小学校　校長
伊藤　隆康

三重県校長会をはじめ、関係各位のご尽力により、今年度は地元三重にて、本研究大会が２日間に渡り開催されました。新任校長の私は、初めて参加させていただきました。

１日目は、第４分科会「知性・創造性」の分科会に参加しました。研究発表の１つは、静岡県富士市小学校長会のカリキュラム・マネジメントによる学校づくりに関する発表でした。「小中一貫教育」「教科担任制」「園小接続」「学校図書館活用と読書指導」等、私の勤務校がある東員町（町内保幼小中 14 園校）が 13 年前から進めている「16 年一貫教育プラン」の柱となる部分と多くの共通点がありました。特に本町すべての小学校で実施している外国語活動・外国語と高学年理科の教科専科制、母胎に命が宿ったとき（－１歳）から幼保小中まで 16 年間の発達段階に応じた子育ての接続・連携では、共感できる話がたくさんありました。富士市の小中一貫では、施設一体型で９年間を３つ（小１～小４、小５～中１、中２・中３）に分割し、カリキュラムを構築している点が、斬新で興味深かったです。もう１つは、自己肯定感の涵養に向けた志摩市小学校長会の取組発表でした。私も子どもたちの自己肯定感の育成に家庭・地域の協力・連携は欠かせないと考えています。取組発表

の中でも、校長が自ら地域に積極的に出向き、協力・支援体制を構築されているとお聞きました。本町でも、左記のプランで「３感（基本的信頼感・自己肯定感・自己有能感）」の育成が大きな柱となっていることから、他市町の同じ方向性を持った取組はとても励みになりました。

グループ討議では、「校長が果たすべき役割と指導性」を観点に、組織的な研修や地域と連携した教育課程について話し合いました。自校研修と関わって、人材育成（若手やミドル）を大きな課題と捉え、職員と一緒に考えたり、方向性を共有したりしながら、管理職やベテランは伴走者として授業づくりや学級経営に参画していくという考えが特に印象に残りました。他県ではコミュニティ・スクールを立ち上げ、学校運営協議会を活用したり、市の臨時職員がコーディネーターとしてサポートしたりしながら、地域教材や地域人材を学校カリキュラムに上手く取り入れている実践が報告され、今後に向けてとても参考になりました。

２日目は、開閉会式と全体会、そして記念講演会に参加しました。

大会長挨拶では、目の前の子どもたちの姿を大切に、誰一人取り残さない教育への決意を、また知事挨拶では、自己肯定感の涵養の重要性が語られ、本県の教育に携わる者としてとても心強く感じました。瀬木直貴さんの講演は、映画製作は「ものづくり」ではなく「ひとづくり・まちづくり」という視点や地域を巻き込む熱量が、同じく日々学校づくりに奮闘している私には大いに共感できる内容であり、刺激的かつ自身のモチベーションアップにもつながりました。また、瀬木さんのつながりを大切にする包括的な人柄や、地域の思いを大切に製作されている姿勢に感銘を受けました。

本大会での多くの学びを、自校での明日からの学校づくりに生かしていきたいです。

◆東陸中岐阜大会報告◆

豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育

木曽岬町立木曽岬中学校　校長
中村　佳代

１日目は２会場、８分科会で協議があり、私は第７分科会「令和の日本型学校教育を担う教師の育成」に参加しました。今年度は学校規模別にグループが組まれていたため共通の課題が多く、共感しながら話をすすめることができました。特に「管理職として何ができるか」という視点に焦点をしぼり、常にこのポイントを意識して話し合うことができました。子どもが主体者となる学校教育の取組について、教科センター方式や異学年交流の取組、新しい形の教室配置、単元内自由進度学習など、地域の実情にあわせた取組がたくさん提示されました。当たり前と思っていたことが、地域が違えば当たり前でないといった例も多く、多くの発見がありました。また広い視野をもって新しい取組に挑戦していく力が求められていると強く感じました。

２日目はバローホールディングス代表取締役会会長兼CEOの田代正美さんによる記念講演がありました。健康のためにはじめたウォーキングから剣道の稽古に始まり、５段をとるに至るまで、60歳をすぎてから行ったという話には感銘を受けました。人の挑戦は年齢を理由にしてとどまってはいけない。人は常に新しい事に挑戦していくのだという強い意志を感じました。バローが人材育成のために掲げている共通要素は、学校教育での教員育成と重なる点も多く「良質なコミュニケーションを築く」「『困ったな』でなく『将来にむけて今何ができるか』と考える」「自分の考えを持ち、良質な問いを出す」という言葉は印象的でした。

◆県研究大会報告◆

第62回 三重県中学校長研究大会に参加して

伊賀市立上野南中学校　校長
野田　真由美

全体会の記念講演では、本居宣長記念館の名誉館長、吉田悦之さんに「本居宣長に学ぶ」と題して、ご講演をいただきました。三重に生まれ育ちながらも、本居宣長の功績等はほとんど知らないことを恥ずかしく思いながら、新鮮な気持ちで拝聴することができました。我々が追求している「学びに向かう力」について、すでに200年前の偉人は、大綱をとらえ、実践されていたことを知り、驚きと共にたくさんのヒントを得ることができました。そして倦(うま)ず弛(たゆ)まず、学び続けることの大切さを教えていただきました。

午後からは、第４分科会に参加させていただきました。１本目は、鳥羽市立加茂中学校の提案でした。鳥羽市の防災に関わる取組について、防災減災教育を進めていくのは学校の役割であるが、学校だけでは限界もあるため、行政地域に訓練の主体を任せつつ連携して進めて行くことの大切さを確認しました。

また、２本目の人権・同和教育の推進では、「地域に根ざした取組とともに」と題した伊賀市立霊峰中学校からの提案でした。「差別をなくす当事者」として、人権問題に関わっていく生徒を育てていくためには、私たち大人も共に学び合い、すべてのつながりを大切にしながら、子どもを出発点として取組を継続して行かなければならないと思いました。

他にも、総合学習の時間を活用し、様々な活動の時間確保をいかに工夫しているかといった交流も行いました。参加された各校の事例やご意見を伺い、充実した学びとすることができました。

◆県立学校長会との懇談会◆

三重の子どもたちの未来のために

中学校部会　川原田　仁幹事
小学校部会　中矢　佳代幹事

8月29日に「令和7年度三重県立学校長会と三重県小中学校長会との懇談会」が開催され、主に3つの議題について活発な議論を交わしました。

まず、「教員確保の現状と対応」について、県立学校から、常勤講師の大幅な欠員により、非常勤講師で授業を補いつつも教員の持ち時間数増や校務分掌の人数を減らすなどの対応を余儀なくされているとの報告がありました。小中学校からは、産休育休取得者や病休者の増加に加え、若手教員が様々な要因で休職や離職に至るケースを伝えました。その後、若手教員へのサポート体制の充実等について協議しました。また、教員不足への対応として、校種の教育活動を通じて生徒に教職の魅力を伝えていく意義を確認しました。

次に、「児童生徒に係る支援情報の引き継ぎと小中高の連携」について、地区内の全高校と全中学校が一堂に会して引き継ぎ会を実施することで、高校での円滑な支援計画立案に繋がっている事例の報告がありました。子どもたちの健やかな育ちのためには、校種を越えた継続的な情報共有が不可欠であることを改めて確認することができました。一方で、引き継ぐ情報の範囲や管理の難しさを課題として共有しました。

最後に、「部活動の地域展開に関する現状と課題」については、令和8年度から休日の地域展開の開始を公表する自治体がある一方、慎重な姿勢を示す自治体もあり、市町によって進捗に大きな差があることを報告しました（高校は当面、地域展開の対象外とされています）。また、市町共通の課題として、指導者や受け皿の確保、費用負担の問題を挙げました。さらに、働き方改革という側面だけでなく、部活動が担ってきた非認知能力の育成といった教育的役割を地域移行でどう担保していくのかという本質的な議論も交わしました。

今回の懇談会では、校種を越えて抱える共通の悩みについて協議するとともに、それぞれの立場の見解について相互理解を図ることができました。「三重の子どもたちを育てる」という視点に立ち、顔を合わせて意見交換できる貴重な機会となりました。

◆本部役員だより◆

変化に応じ、友に歩む学校づくり

三重県小中学校長会　中学校部会長
市森　幸子

令和7年度は、教育改革の取組がさらに進展し、次期学習指導要領の方向性を見据えた準備が求められる一年となりました。本部役員は、県内のさまざまな地域から集まり、それぞれの経験や視点を持ち寄りながら、東海北陸中大会や全日中大会などで三重県の現状と取組を発信し、他府県との情報交換を重ねてきました。こうした交流は、教育課題への理解を深め、視野を広げる貴重な機会となり、今後の学校づくりに生かしていきたいと考えています。

次期学習指導要領の論点整理では、3つの方向性が示されています。第一に、「主体的・対話的で深い学びの実装」、第二に「多様性の包摂」、第三に「実現可能性の確保」です。これらを通して、子どもたちが自らの人生を舵取りできる力、民主的で持続可能な社会の創り手を育むことが求められています。こうした考え方は、三重県教育ビジョンに掲げる「自立する力」「共生する力」「創造する力」を育む教育の推進と深く結びついています。

この変化を踏まえ、主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりが不可欠です。そのためには、教職員が学び続ける環境を整え、働き方改革を進めながら専門性を高めることが重要です。加えて、教員不足の課題にも向き合い、魅力ある職場づくりを進めることが、未来の学校を支える力となります。子どもたちの未来を切り拓く教育を、共に進めてまいりましょう。

最後に、会員の皆様には三重県小中学校長会の諸活動にご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございました。本部役員一同、深く感謝申し上げます。

随　想

様々な出会いとともに

紀北町立赤羽中学校　校長
藪中　一浩

平成元年度、私は尾鷲市立輪内中学校の社会科教諭として採用され、教員生活のスタートを切りました。それから37年間に渡り教職を続けられたのも、様々な出会いがあり、多くの人に支えられたからだと思っています。

何よりも、子どもたちとの出会いはかけがえのないものでした。部活動では最後の試合に負けた時など、様々な思いがこみ上げてきて、誰よりも私が泣いていたこともありました。若い頃、人間関係がなかなか築けず、クラスの子どもたちの心が離れていくことに不安を覚えた私は、何とか関係を繋ぎとめようと、レクリエーションばかりしたこともありました。苦楽をともにしてきた子どもたちとの別れである卒業式は、「この瞬間のために教員をやっている」と思えるほど毎回感動し、明日からも頑張っていこうという気持ちにさせてくれました。

保護者の方にもよく支えていただきました。生徒指導上の問題で家庭訪問をし、何時間にも及ぶ話し合いの末、「分かった、明日からそうさせるわ」と言っていただき、こんな若輩者の意見を聞いていただいたんだと感謝した覚えもあります。

縁があって、通算12年間を行政の世界で過ごしたことも、貴重な経験でした。教員以外の方とも一緒に仕事をする中で、大いに見識を広げられたと思っています。

そして、中学校籍だった私が校長として最初に赴任したのは小学校でした。そこから5年間は新鮮な気持ちの中で楽しく過ごすことができました。そしてラストイヤーの今年、13年ぶりに中学校に戻ってきて、「こんなんやったなあ」と、久々の感覚を味わっています。

これまでの一つひとつの出会いを胸に、今後も子どもたちのため、地域のために、微力ながら何かしらの恩返しができればと思っています。

これまで出会ったすべての人に「感謝」

津市立久居中学校　校長
青木　修

今年度役職定年を迎えるにあたって、すべての教育活動への取組には「最後の」という思いがついて回り、38年間の教員生活を振り返る機会となっています。

私の初任校は、県南部の当時全校生徒1000人を超える大規模校で、生徒指導上の課題も多い学校でした。右も左もわからない初めての教職、それでも子どもや保護者・地域の方々からは「先生」と呼ばれました。先輩方からの指導・助言や支援をたくさん受け、ここでの5年間の経験がその後の教員生活の原点となっています。

その後、県北部の学校で6年間、津市内の学校で13年間の教員生活を過ごし、市教委の事務局勤務5年を経て、教頭職も3年間経験しました。この間、心も体も折れそうになった時期がありましたが、子どもや保護者、先輩方のおかげで何とか乗り越えることができました。

6年前、校長として新たな一歩を踏み出したとき、目の前の子どもたちだけでなく、学校全体、そして教職員一人ひとりの成長も願う立場へと、私の視点は大きく変わりました。ときに厳しい決断を迫られることもありましたが、常に子どもたちと教職員のより良い成長を願う一心で歩んできた6年間でした。

教員生活、そして校長生活を通じ、私は多くの人々に支えられてきました。尊敬する先輩方、共に苦楽を分かち合った同僚、学校を信頼し、ご協力くださった保護者・地域の皆様、そして何より、私の人生を彩り豊かにしてくれた子どもたち。皆様への感謝の気持ちは尽きることがありません。教員人生に終止符を打つ今、教育現場は去りますが、未来を担う子どもたちの健やかな成長を願い続ける気持ちは変わりません。

38年間、本当にありがとうございました。皆様のさらなるご活躍を心よりお祈り申し上げます。

地区校長会だより

亀山市小中学校校長会

つながる連携

亀山市小中学校校長会の会議は、14人の校長が近い距離で互いに顔を見ながら話し合うことができます。そのおかげもあって、校長どうしの関係が、とても親しく感じられます。もちろん平素においても、個々の校長間で連絡を密に取り合い、お互いに相談を持ち掛けたり、情報交換を行ったりしています。

近年は、新任校長に加え、市外から校長を迎えることもあります。第１回の会議において、校長会内や関係諸団体の担当を決める際には、経験豊富な先輩校長が率先して担ったり、新たなメンバーに取り組みやすい担当を勧めたりします。また諸課題についても、14人全員で一緒に考えて解決方法やヒントを導き出しているので、強い連帯感と温かい安心感を共有することができています。

亀山市では市内退職校長の方々との交流もあります。時代や社会情勢は変わりますが、子どもたちを中心に据えた学校教育の根幹は変わりません。退職校長の方々から、改めて学校教育の素晴らしさや校長職のやりがい等を伺ったり、現況についてご助言をいただいたりしています。

今後も亀山市小中学校校長会は、県内各地区の校長会とともに、校長どうしの関係や連携つまり「つながり」を大切にしながら、子どもたちを誰一人取り残すことなく、子どもたち誰もが自分らしくいられる学校教育を一層推進していきます。

多気郡中学校長会

連携と信頼のもとに
―地域とともに歩む中学校教育―

多気郡小中学校長会中学校長部会は、現在、多気町に２校、明和町に１校、大台町に２校の計５校で構成されています。それぞれの町の特色や地域資源を生かし、地域に根ざした教育活動を各校で展開できていることが大きな強みです。平成18（2006）年の市町村合併により、郡は三町に再編されましたが、「同じ多気郡の中学校」というつながりは今も変わらず、連携と協力を大切にしながら、よりよい教育の実現に向けて取り組んでいます。

中学校部会の活動は、小学校部会と常に合同で行っており、月１回の定例会を軸に、交流や研修、研究大会などを重ねてきました。新型コロナウイルス感染症が広がる中でも、そのつながりを絶やすことなく継続できたことは、郡内の結びつきの強さを物語っています。

本年度は、郡内５校すべてで校長が交代し、そのうち３名が新たに着任しました。新体制のもと、お互いに気軽に相談や情報交換ができる温かく前向きな雰囲気が育まれており、大変心強く感じております。

教育現場は不登校やいじめ、部活動の地域移行、教職員の長時間労働等、様々な課題に直面しています。こうした共通の課題に真摯に向き合いながら、郡内各校がこれまで以上に連携を深め、地域とともに歩む教育の実現を目指してまいります。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

編集後記

昨年、日本は第二次世界大戦終結から「戦後80年」という大きな節目を迎えました。この80年という歳月は、平和の尊さを次世代に継承する義務を、私たち教育現場の最前線に立つ校長として、改めて深く課しています。特に、現代の複雑な世界情勢を踏まえ、「平和教育」はその射程を一層「グローバル」な次元へと深く拡張する必要があります。

従来の平和教育が、過去の戦争の悲劇と、そこから得た教訓の継承に重きを置いてきたことは、決して揺るがない教育の基盤です。しかし、今後の平和教育は、単なる反省や記憶に留まらず、地球規模の課題を能動的に解決できる「平和構築の担い手」を育成する方向へと進めていくべきだと強く確信しています。

私たちが直面する現代の危機は、国境を容易に越えて広がっています。気候変動による環境難民の発生、貧富の格差拡大、人権侵害、そしてデジタル技術が生む新たな社会的分断といった問題は、一国の歴史学習だけでは対応できません。真の平和とは、単に「戦争がない状態」ではなく、地球上のすべての人間に公正さと包摂性が保証された「持続可能な社会システム」そのものだからです。

新しい平和教育の核となるべきは、異文化理解と対話の能力です。子どもたちは、自国の歴史や文化を深く学ぶと同時に、世界の市民としての共通の倫理観と責任感を育まなければなりません。SNS が世界を瞬時に繋ぐ現代において、情報の真偽を見極め、偏見を乗り越えるリテラシー教育は必須です。これは、身近なコミュニティでの小さな対話から、国際的な連帯へと視点を広げる橋渡しとなります。戦後８０年を機に、わたしたちは過去の教訓を未来の力に変え、「グローバルな視点を持つ平和の創造者」を育成する教育を再構築しなければなりません。すべての若者が、分断ではなく協調を選び、持続可能な世界を共に築く知恵と勇気を授けること。これこそが、この歴史的な節目を迎える私たち世代に、そして教育を司るものに託された、重要な使命であると感じます。

最後になりますが、いつも快く広報原稿の依頼にご協力いただき執筆してくださることに心より感謝申し上げます。今年度もありがとうございました。